

3 国立二期校162人名門今治西高の 学力と野球力

日本では、他人の出身高校が話題になりやすい時期が二度ほどある。三月の東大など、国立大学合格発表のときと、この高校野球のときである。

ことし甲子園に集まった代表四十一校を見てみると、これも名門校ぞろい。しかし、春(進学)の名門よりは夏(野球)に話題になりやすい名門校が多い。その中で、春も夏も話題になる高校があった。愛媛県代表・今

治西高校がそれだ。

今治西高は三十八年、準決勝で剛腕投手・池水を擁する下関商と対戦、3-2で惜敗はしたが好試合を展開してスタンドを沸かせた。その今治西が三年ぶり五回目の甲子園の土を踏む。

り。進学率も一〇〇%。他県の教育ママが聞いたら、目を回すような数字だが、これも

「今年は県下で、松山東高に次いで二番目」(加治定夫教頭)なのぞろいだ。



榎垣修氏



田坂輝敬氏



丹下健三氏



山本弘氏

今治市は、旧久松藩三万五千石の城下町、若き日の徳富蘆花が青春の一時期を送り、明治のキリスト教史に「今治バンド」の名を築いた。いまはタオル生産全国一に象徴される典型的な商工津都市部。

チームワークと精神力で

さて野球部。もちろん部員三十五人全員が進学を希望している。「例年二、三人は国立に進むんだが、今年はどうかな。ま、今年の出場校のなかではウチが学力的にはトップではないでしょうか」と、亀山和廣監督は胸を張る。

この高校、他にもボート部、弓道部などレベルの高いクラブがあり、総じて運動熱は盛んだが、「武」だけを志す者はいない。とはいっても「文武両道」

藤と控えの三谷を押し立てて、県予選六試合のうち、三試合を一点差で逃げ切って、キップを手にした。

各分野に有名人OB輩出

ことしは例年よりデキが悪かったらしいが、それでも、東大六人、京大三人、大阪大十人を輩頭に国立二期校が百六十二人、氏、建築界の丹下健三氏、田坂輝敬新日鉄社長、山本弘住友信託銀行会長、桑江義夫川崎製鉄社長、榎垣修三和銀行副頭取、寺尾正二東京高裁判事ら、各界に人物を送り出している。

進学熱が高いとはいっても、今治市には予備校、進学塾といつたものはゼロ。「課外補習も三年生が夏休みなどにやる程度で、ガリ勉タイプの子は少ないですな」(加治教頭)もつとも「ここ二、三年は医学部に人気が集まっている」という。

のハンデは隠せず、野球部員の多くは、早稲田、法政、中央、駒沢といった、六大学、東都の「野球名門校」に進学するのが多いそう。今治西出身でプロ野球で活躍しているのは、阪急の代打男・高井、大洋の重松だ。この練習は放課後、「合理的かつハード」に四、五時間やって、サッと切り上げるのが「伝統」だ。今年もステートアマならぬ、ハイスクールアマのような「名門私立」がズラリ。とてもこの程度の練習量ではと、心細

西条高と並んで、四強の一角を占め、全国的にもツトに知られた野球名門校だが、地元ではむしろ、進学の名門校として評判が高い。

二期校が九十五人。ことしの卒業生が四百五十一人というから、国立大進学者だけがゆらに半数を超す名門ぶ

くなるが...。亀山監督は「高校野球は総合力。ウチは、草野球並みの技術で、プロにスカウトされるような子もいないが、チームワーク、精神力はどこにも負けない。」

高校野球にスタープレイヤーはいらないはず。きつといい試合をしてみせませうよ」と、自信のほどをチラリ。最近の「野球高校」の甲子園進出には「関係ありません」とかわし、「関係はあくまで学業が本分」。原、酒井らスタープレイヤーの人気で埋まりすぎる今夏の甲子園だが、これを苦々しく思う「熱狂的ファン」のためにも、すがすがしい活躍をみたいものです。

(本誌・大津俊彦記者)

